



臨港都市における斜面市街地の眺望景観形成に関する研究 : 釜山・神戸の比較研究を通じて

徐, 金泓

(Degree)

博士 (工学)

(Date of Degree)

2003-03-31

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲2871

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1002871>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 292 】

氏名・(本籍) 徐 金 泓 (韓 国)

博士の専攻分野の名称 博士 (工学)

学位記番号 博い第309号

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

学位授与の日付 平成15年3月31日

【 学位論文題目 】

臨港都市における斜面市街地の眺望景観形成に関する研究
—釜山・神戸の比較研究を通じて—

審 査 委 員

主 査 教 授 安田 丑作

教 授 室崎 益輝

教 授 足立 裕司

助教授 三輪 康一

本論文は、臨港都市における斜面市街地の都市景観の特性を把握すると共に、眺望型景観形成の方向を探るものである。

臨海部に位置する都市では、斜面地に住宅市街地を形成しているものが世界の各地に数多く認められる。山裾の起伏にとんだ土地形状を背景に、地区景観や眺望などの面で優れた住環境上の特色を示すものも少なくない。本論文は、この斜面市街地に着目し、その代表的な都市であり、建築・都市計画の法的な制度が類似する、韓国・釜山と神戸とを調査対象に、その都市景観形成上もっとも重要である眺望型の景観形成のあり方を示すものである。

本論文は研究の背景と目的、研究の構成を示す序論、主論となる第1章から第5章、以上を取りまとめ、今後の眺望景観の方向を示す結章の計6章からなる。

まず第1章では、韓日における都市景観関連政策の現況を整理し、その課題を示した。さらに、イギリスの「戦略的眺望」と「ローカルビュー」、フランスのバリの「フュゾー」とアメリカの眺望景観保全施策を中心に先進都市の眺望景観形成手法を概括した。

第2章では、臨港都市の中でも、斜面地特有の景観を作り出している釜山と神戸について、それらの景観形成の特性を、文献調査や現地での調査をふまえ、自然環境、都市形成、都市計画制度の3つの要因を分析の視点として析出した上で分析を行い、その共通点と差異を導くとともに、「港」に対する空間的・心理的な分離が進みつつある現状とその問題点を指摘した。

第3章は、釜山および神戸で実施した市民への意識調査を分析・考察したものである。調査は、両都市の都心で日常生活を過ごしている、公務員、設計者、一般市民という都市施策について違う立場属性を枠組みの中心にすえて実施した。その内容は、「臨港都市における都市のイメージ」、「まちの風景」、「都市景観について」の3つのテーマにより構成されている。調査の結果から、臨港都市では斜面市街地から「みなとまちらしい」風景を眺められるという要素がその魅力であり、臨港都市のイメージを代表する空間については都心ウォーターフロントであることを導くとともに、臨港都市における市民の日常生活からの「海」と「港」への眺望景観は重要な生活環境であることを指摘した。また、両都市の差異に着目すると、釜山市民の方が臨港意識は高いものの、都市景観の概念は一般の市民には浸透していないこと、さらに、釜山市民は都市景観を都市イメージとして理解しているのに対し、都市景観が一般的な概念として定着されている神戸の市民は都市風景として認知していることを明らかにした。

第4章では、第3章で得た結果をもとに、まず、釜山と神戸の斜面地の断面特性と、平面特性である街路パターンを中心にした眺望景観形成要因による斜面市街地の3次元的な眺望景観の特性を把握した。つぎに、眺望景観の評価に大きく影響を与える、視点場の特性による眺望類型の類型化を行った。その結果、臨港斜面市街地では断面属性である傾斜や標高によって、「可視・不可視」、「不可視深度の存在」などの眺望景観類型を決定する要因を抽出した。この要因をもとにして、釜山と神戸の斜面市街地に現れる眺望景観特性を検証した結果、釜山の場合は、急斜面で市街地が形成されたため、街路整備や面的整備が困難であり、急斜面の地形と高度制限によって保全されるパノラマ型景観が代表的な眺望景観であることとともに、一方比較的傾斜が緩やかな神戸の場合、グリッド型の街路が形成されている地域には街路や河川によるビスタ型の眺望が多く現れることを明らかにした。

一方、以上の眺望景観形成についての眺望景観意識に関する調査では、住民の公的眺望景観の保全と育成に関する意識を把握するものとして、釜山(2001年11月)と神戸(2001年12月)における臨港斜面市街地の山麓地域で日常生活を過ごす住民を対象に、生活型眺望景観の重要性と公的眺望景観コントロールに対する意識についてアンケート調査を実施した。

分析の結果、釜山では臨港意識や眺望景観保全についての意識が高くなっているが、その原因は、斜面特性では、釜山の斜面市街地には「みなとまちらしい風景」がパノラマ的に広がっている地域が広く分布し、日常生活により密接であることが大きく影響しており、生活と眺望との親密感が眺望価値を高く認識し、今後の眺望景観保全の必要性についても高い意識を形成させてきたことが明らかになった。一方、神戸の場合、それらの意識が釜山と比べると低いが、ビスタの眺望が街路や河川との交差点で点的に存在しているため、眺望と出会う機会が比較的に少ないことがその要因といえる。

第5章は、臨港斜面市街地における眺望景観の認識構造を把握するものである。眺望景観の認識構造は、釜山(1999年11月、2001年11月)と神戸(1999年12月、2001年12月)で各2回ずつ、対象地から選定した景観サンプルを用い、SD法による景観評定実験と景観認識量調査を実施し、その結果、眺望景観の各類型別評価を行うとともに、因子分析による景観評価軸を抽出した。類型別評価からは、「遠景」が可視できる眺望景観と「海」を対象にしている景観が高い評価を受けている。「ビスタ型」の評価は視点場の条件により比較的明確な評価傾向にあるが、「パノラマ型」の評価の傾向は、評価項目によって個人の差が多く現れることが把握できた。このことは、調査対象が日常生活での眺望景観であることから、個々の視点場の環境が評価に大きく影響していることを示唆している。つぎに因子分析からは、眺望景観についてアメニティ因子、アイデンティティ因子、イメージ因子の評価軸が抽出されたが、被験者グループ特性による景観認識の差を比較した結果、日常的な景観に対する主体的な立場であるグループでは「親密感」が景観評価に影響を与えており、客体的な立場にあるグループは眺望景観を「アメニティ性」により評価することから、同じ景観についても景観認識構造に大きく差があることが明らかになった。

以上の研究をまとめる結章では、各章の要約とその結果にもとづいた示唆点と課題にもとづく眺望景観形成の今後の方向を論じるものである。今後の眺望景観形成の方向については、それぞれの地域特性に応じた適切な眺望景観マネジメントの必要性を指摘している。すなわち、「ビスタ型」の景観が現れる地域については、現在のビスタを保全するとともに、生活に親密な空間からの眺望点を増やしていく方針が必要である。一方、高度制限によって現れるパノラマ型景観が広がっている地域については、現在の一括的で2次元的な高さ制限に依存している規制ではその限界があるため、総合的で、地形特性を把握した3次元的な眺望景観の保全方針が必要であり、現在の高い臨港意識を景観保全意識へ活用する方法を探る努力が急がれている。

氏名	徐 金泓		
論文 題目	臨港都市における斜面市街地の眺望景観形成に関する研究—釜山・神戸の比較研究を通じて—		
審査委員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教 授	安 田 丑 作
	副 査	教 授	室 崎 益 輝
	副 査	教 授	足 立 裕 司
	副 査	助教授	三 輪 康 一
	副 査		

要 旨

臨海部に位置し斜面地に住宅市街地を形成している都市は、世界的にも数多く認められる。これらの都市では山裾の起伏にとんだ土地形状を背景に、眺望の面で優れた景観の特色を示すものも少なくない。本論文は、臨海部の斜面市街地に着目し、その代表的な都市であり、都市計画と建築行政についての法的制度が類似する、韓国の釜山と日本の神戸とを調査対象都市にして、斜面市街地の都市景観特性を視覚構造と認識構造から把握することを通じて、眺望型景観形成とその具体的施策展開を論じたものである。

本論文は研究の背景と目的、研究の構成を示す序論、主論となる第1章から第5章、以上を取りまとめた今後の眺望景観形成の方向を示す結章の全7章からなる。

まず第1章では、韓日における都市景観関連政策の現況を整理するとともに、イギリスの「戦略的眺望」と「ローカルビュー」、フランスのバリの「フゾー」とアメリカの眺望景観保全施策を中心に先進都市の眺望景観形成手法を概括し、現在の都市景観施策における眺望景観施策の位置づけを行っている。

第2章では、臨港都市の中でも、斜面地特有の景観を作り出している釜山と神戸について、それらの景観形成の特性を、文献調査や現地調査をふまへ、自然環境、都市形成、都市計画制度の3つの要因を分析の視点として両都市の景観特性の共通点と差異を導くとともに、「港・海」と「都市」との空間的・心理的な分離が進みつつある現状とその問題点を具体的に指摘している。

第3章は、釜山および神戸で実施した市民への眺望景観意識調査の結果を分析・考察したものである。調査は、両市の都心で日常生活を過ごしている公務員、設計者、一般市民という異なる属性を対象に実施され、その結果から臨港都市では斜面市街地から「みなとまちらしい」風景を眺められるという要素がその魅力であり、都心ウォーターフロントが臨港都市のイメージを代表することを導くとともに、市民の日常生活における「海」と「港」への眺望景観が重要な生活環境資源であることを指摘している。つぎに、両市の差異に着目し、釜山市民の方が臨港意識は高いものの、都市景観の概念は一般の市民には浸透していないこと、都市景観を概括的な都市イメージと同義的に理解しているのに対し、一方の神戸市民は都市景観が一般的概念として定着しており、都市の風景構造として認知していることを明らかにしている。

第4章では、第3章で得た結果をもとに、まず、両市の斜面地の断面特性と平面特性である街路パターンを中心にした眺望景観形成要因による斜面市街地の3次元的な眺望景観の特性を把握し、視点場特性による眺望類型の類型化を行っている。その結果、臨港斜面市街地では断面属性である傾斜や標高によって、「可視・不可視」、「不可視深度の存在」などの眺望景観類型を決定する要因を抽出している。この要因をもとにして、釜山と神戸の斜面市街地に現れる眺望景観特性を検証した結果、釜山の場合は、急斜面

氏名	徐 金泓		
<p>で市街地が形成されたため、街路整備や面の整備が困難であり、結果的に急斜面の地形と高度制限によって保全されるパノラマ型景観が代表的な眺望景観であることを示している。これに対し、比較的傾斜が緩やかな神戸の場合、グリット型の街路が形成されている地域には街路や河川によるビスタ型の眺望が多く現れることを明らかにしている。</p> <p>第5章は、臨港斜面市街地における眺望景観の認識構造と眺望景観意識を把握したものである。前者については、両市の対象地から選定した景観サンプルを用い、SD法による景観評定実験と景観認識量調査を実施し、眺望景観の各類型別評価を行うとともに、因子分析による景観評価軸を抽出している。類型別評価からは、「遠景」が可視できる眺望景観と「海」を対象としている景観が高い評価を受けていること、「ビスタ型」の評価は視点場の条件により比較的明確な評価傾向にあるが、「パノラマ型」の評価の傾向は、評価項目によって個人の差が多く現れることを示している。つぎに因子分析からは、眺望景観についてアメニティ因子、アイデンティティ因子、イメージ因子の評価軸を抽出し、被験者グループ特性による認識の差として、日常的な景観に対して主体的な立場にあるグループでは「親密感」を、客体的な立場にあるグループでは「アメニティ性」をより評価することを示し、視覚的に同じ景観についても両者で景観認識構造に大きく差があることを明らかにした。一方、後者の公的眺望景観の保全と育成に関する意識に関する分析では、両市の臨港斜面市街地の山麓地域で日常生活を過ごす住民を対象に、生活型眺望景観の重要性和公的眺望景観コントロールに対する意識についてアンケート調査を実施した。分析の結果、釜山と神戸では臨港意識や眺望景観保全についての意識に差異がみられることを提示し、その要因として、両市の斜面特性の差とそれによって生じる生活と眺望との親密感の存在を指摘している。</p> <p>以上の研究をまとめる結章では、各章の要約とその結果にもとづいた示唆点と課題を指摘するとともに、眺望景観形成の今後の方向を論じている。今後の眺望景観形成の方向については、それぞれの地域特性に応じた適切な景観形成方策（眺望景観マネジメント）の必要性を指摘している。すなわち、「ビスタ型」の景観が現れる地域については、現在のビスタを保全するとともに、生活に親密な空間からの眺望点を増やしていく方策が必要であり、一方、高度制限によって保全されているパノラマ型景観が広がっている地域については、現在の2次元的な高さ制限に依存している画一的規制ではその限界があるため、地形特性を考慮した3次元的で総合的な眺望景観の保全方策が必要であり、現在の高い臨港意識を景観保全意識へ活用する方法を探る努力が急がれていると指摘している。</p> <p>本研究は、臨海部の斜面市街地の眺望景観について、地形などの物的特性と景観の認識構造と保全育成意識との関係性について研究したものであり、今後の新たな眺望景観施策展開を考える上で重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。</p> <p>よって、学位申請者の徐 金泓は、博士（工学）の学位を得る資格があると認める。</p>			